

## 追悼 服部民夫先生

服部民夫先生は昨 2015 年 8 月 5 日に永眠されました。2007 年突如病に侵され、重い後遺症を抱えた 7 年半の療養生活の後の逝世でした。

先生は 1967 年に同志社大学文学部社会学科社会学専攻（当時）に入学され、1971 年に卒業後、アジア経済研究所研究員、東京経済大学教授を経て 1996 年に同志社大学社会学部教授に就任され以後 5 年間にわたって教育・研究に従事されました。2002 年に東京大学より強い招聘の要請があり、以後は東京大学教授としてその研究生生活を過ごされました。

先生の研究関心は一貫して韓国社会研究にあり、韓国における人間関係、家族、親族について多くの業績を発表してこられました。なかでも先生の韓国財閥についての一連の研究は極めて高い評価を受けており、いくつもの記念賞、学会賞を授与され、この領域では国内はもとより、国外においても指導的立場の研究者として学会をリードしてこられました。教育面においては学生、院生に学問的立場では厳しい姿勢を緩められることはありませんでしたが、その一面、学生、院生に対して常に優しく、根気よく接してこられ、赴任先のどの大学においても学生から心より慕われる存在でした。こうした指導によって、先生の下からは多くの専門研究者が羽ばたいて行き、学会の中では出身大学を問わない「服部門下」が形成されてきました。

個人としての先生は極めて優しく、温厚ですべてをソフトに受け止める幅の広い人格をお持ちでしたが、ただ一つ心にこだわりをお持ちだったのは同志社人としての誇りと同志社への強い愛着でした。大学卒業後先生の活躍の場は同志社時代を除けば常に東京にありましたが、東京以外の大学出身者の少ない環境の中でも先生は同志社大学出身であることを誇りをもって示し続けられました。同志社大学への赴任が決まったおりには、先生はこの上ない喜びであると話され、在任中は常に楽しそうな笑顔をたやされませんでした。実際、その後東京大学から強い要請があったおりにも先生には同志社を離れることに相当な逡巡があり、むしろ心中では強力な引き止めを期待している様子さえありました。また、病に倒れられてからも先生は東京大学のことを気にかけることはもちろんでしたが、同志社の動向は常に気にかけておられました。先生の同志社大学在任は 5 年と決して長いものではありませんでしたが、同志社は常に先生の心の中にあり、この意味で先生の生涯は誇り高き同志社人としての生涯でもあったと思います。ご冥福を祈ります。

森川眞規雄